

加藤和徳さんを偲ぶ

村山 正市

加藤和徳さんが亡くなられて 100 日を過ぎました。いただいた書籍や紹介された資料を見返ししています。

加藤さんとは、板碑や石造物の研究で同好であったことから、いろいろとご指導いただきました。何よりも現物主義で、必ず現地に赴き確認する、そして間違いを正す研究態度にいつも教えられました。関東在住の時から板碑の研究をされ、山形へ戻られてからもオートバイで現地に向かわれ、何度も通われていました。在野の研究者の鏡的な存在でした。自分の目で見ないと信じないという研究者としてあるべき姿です。

特に天童市内の調査の際には、電話をいただき対応したことが思い出されます。天童にも烏八臼の板碑型の墓標が高嶺北曹洞宗永源寺にあることを「山形考古」へ紹介したことがあり、確認したいと言われ同行再調査したことがありました。高嶺皇大神社（元大日堂、当山派行蔵院同行本覚院）の門前の冠木門石幢は古いと思う。刻まれているのは明治の消防組だと話したところ、他にも年号など刻まれており、明治のものは追刻ではないか。高嶺皇大神社境内や神社内をみてもいろんな研究題材が多いと話されていました。山形市北山形慈光寺の鈴木備後守、小泉掃部の万年堂型の墓の中に五輪塔があり、置賜に多いタイプではないかと話され、村山地域では数少なく興味があると。古い写真があれば、ほしいと希望され、野口先生を通じて提供させていただいたところでした。しかし、それに対する論考はありませんでした。村山民俗学会、他の研究会でもいろんな話をお聞きして、県内の板碑の集成をすることで、中世の庶民信仰が見えてくるんだと言われた。

これまでの調査資料を紹介しておきたいと精力的に紹介されてこられました。本会『村山民俗』、山形県文化財保護協会『羽陽文化』、さあべい同人会『さあべい』等へ寄稿する他、自費出版され、数多く研究誌にまとめられました。その業績は後世に残る大切な遺産です。

これまでの御研究に敬意を表するとともに、来世でお会いした時には、また一緒に調査を行いご指導ください。

次年度の民俗誌 古代から限界集落へ

当村最後の土葬（2）